
戦士くんと勇者ちゃんと

SYO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦士くんと勇者ちゃんと

【Nコード】

N8602X

【作者名】

SYO

【あらすじ】

ある日、クロ・ヴェルスと呼ばれる少年は【勇者】となり世界を救う旅に出る。……という夢を見ていた。そしてその後、どこか頼りない【勇者】サクラと出会い、魔王を倒す旅に出るのである。

想像力豊かな【戦士】くんクロと、どこか頼りない【勇者】ちゃんサクラとまだ見ぬ仲間達と織り成す冒険ファンタジー。

第1話「勇者ここに誕生せり」

「……い……口……なさい……」

- 頭の中で不思議な声が聞こえる。

微かにしか聞こえないが、その声は女性らしく、とても静かで柔らかくて、まるで母性の象徴ともいえるものだった。

それに反応して、緑が俺の視界に微かに見える。それはゆらゆらと揺れつつ、俺の肌にくすぐったい感覚を与える。霞んだ視界に映るその緑は地面にたくましく生えてる草だと俺は知った。

「【勇者】よ……起きなさい……」

頭で聞こえた女性の声がハッキリ聞こえるようになり、ボヤける視界の中で体を起こして目をこする。

先ほどの地面に生えてた草は無限に広がり、その向こうには大きな滝があつて、滝壺に打たれた水しぶきが太陽と合わさり小さい虹を作つて自然の美しさを際立たせる。

そして声の主がいる方向へと体を向けた。

「目覚めましたね……【勇者】クロ・ヴェルス」

- 女神。

俺ことクロ・ヴェルスの名を呼んだ彼女の第一印象はその言葉がとても似合う。

緑色のロングヘアに色とりどりの花の髪飾り。服は清純さを引き出す絹の織物で、彼女の後ろには神々しいオーラが漂う。

「勇……者……?」

素朴な疑問を彼女に返す。

彼女はそれに頷いて、

「そうです。貴方は【魔王】を倒すために生まれた存在……いわば神から与えられし運命……」

勇者。魔王。神。運命。

彼女の放つ言葉1つ1つ全てに信憑性があるとそう俺は感じた。それはやはりあの神々しさからだろう。

「さあ……これを……」

彼女が手を前に出し、光が集う。

その光はだんだんと剣の形になり、俺の両手で完全に剣の形が出来る上がる。

「……」

あまりの壮麗さに絶句する。

所々宝石が埋まってる白い柄に鞘。

試しに剣を抜くと、刀身から光が漏れて一瞬目が眩む。それに慣れて刀身を覗くと、それは鋭い刃を誇り、【勇者】の武器としてはいささか頼りになる相棒となるだろう。

「これを……俺に……?」

すると彼女は笑顔で、

「はい。それを手にまだ見ぬ仲間と共に、世界を脅かす【魔王】を倒してください」

心の底から何かが溢れ、体は震える。

そして精一杯の声を彼女に発した。

「分かりました！」

「では……世界を頼みましたよ……」

おぼろげな声を残して、彼女は消えた。

かくして俺ことクロ・ヴェルスの【勇者】としての旅が始まった。

これは、世界を絶望に染め上げる【魔王】と呼ばれし魔族の王と、人類の希望【勇者】とその仲間達による冒険記である……。

第2話「クロ・ヴェルス」

- 浮遊感。

体に風が通って心地良く、微かに開いた目で覗いた木造の景色を横目に、重力からの束縛を解放を肌で感じていた。

しかし、制限というものがこの世界にはありまして、一時的な無重力体験のサービスは終了を余儀なくされ、延長も虚しく重力の抱擁というものを受けるのである。

ゴツンッ！！！

「痛いつ！！？」

後頭部に痛烈な衝撃を送られ、体内を蝕む睡魔は明後日の方向へと消えていった。

「おはようクロ・ヴェルス」

俺のフルネームを唱えた声の主は女性。すぐ様振り返って主の姿を見る。

「母さん……」

腰まである黒髪に黒眼で、無地の服の上に小麦色のエプロンを着ている。

「おはようクロ。調子はどうかしら？」

「最悪かな」と、一言。

「現実是最悪でも、夢では壮大なプロローグを引っさげて旅に出る一歩手前だったのにな。【勇者】として」

「バカな……何で俺の夢の内容を……」

「いや、普通に寝言で聞こえてたけど」

「恥ずかしい!!」

「どんだけ夢で感情導入してたんだよ俺!!」

「それにしても、貴方【勇者】って……それは程遠い【戦士】なのに……まあ、それで幸せならいいけどね」

「くっ……こんな状況での母の愛は、息子の心に傷をつけるというのを学ぶべきだ……!!」

「もちろん知っててやってるわ」

「余計質悪いぞ!!」

そんな俺の母さんはジト目で、

「それより勇者様（笑）早く下に行ってご飯食べなさい。冷めちゃうわよ」

「（笑）は煽りの象徴として受け取っておこう我が母よ」

そう言って俺は自分の部屋を出て食卓へ向かう。

とまあ母さんも言ってた通りに、最初の【勇者】としての世界を救う壮大なプロローグは全て夢だ。そう、一般で言う夢オチ。

現実での俺は【戦士】という魔力を微塵も持たない超力尽くの職業なのであって、【勇者】と呼ばれる世界に愛された超VIP待遇のイケメン（美女）とはやはり縁もゆかりも無い存在なのである。

別に夢でくらい自分を輝かせてもいいと俺は思う。むしろ誰でも一度はやっている事だろう。

誰だって輝く主人公を描いて楽しんだり自分を慰めたり、それを目指して頑張る人だっている。

残念ながら俺は前者で、小さい頃から【勇者】を夢見てはいたが、現実は甘くない。人生は思い通りになるだなんて誰が言った事だろう。とんだ嘘っぱちである。

食卓に並ぶパンとスープを横目に、椅子へと座る。

「いただきます」

食事前の挨拶は我が家の礼儀。

それに嫌いな食べ物を残さず食べるもの我が家の礼儀である。

パンの右端から中心目掛けて一気に頬張り、3回噛んだところでスープを啜る。

カッチコッチと部屋に響く時計の単音に耳を傾け、更に一気にパンを口の中へ頬張る。

途中にスープを啜って、偶然目に入った『魔導の書・上巻』に手を取り数ページめくる。

本にたくさん付いた手垢、所々ボロボロで読めない部分があった。

懐かしい。

あの時ががむしゃらに【勇者】目指して頑張って魔法の練習してたっけなあ……。

「……」

無言で本を置いて、自分の部屋に向かう。

「【勇者】……か」

結局は生まれながらのセンスがものを言う。

俺はそのセンスは努力次第でなんとかなるかと思った。でもダメだった。

努力では超えられない壁。それを知った8歳の俺はすぐに【勇者】の道を諦めた。

8

部屋の鏡の前に立って服を着替える。

鏡に写る俺は、黒髪黒眼という母さんのをそのまま受け継いでいる姿があつた。

その天然の黒に合わせた服は白を強調した物で、ズボンは少しダボつとした青色。

そして母さんが俺を無重力体験したベッドの脇に置いてある剣を腰に着ける。

基本というか盾などの防具は重くて邪魔になるで不要。これで準備完了だ。

極めて普通の戦士。一般すぎて普通以外に言葉が見当たらない。

それが俺こと【戦士】クロ・ヴェルスである

第3話「冒険者ギルドでの話」

さて、軽い自己紹介も終わりそろそろ仕事場に向かおうと思ったので、家の扉を閉め、足取りをこの国『エルンスト』の北東部へと進める。

ちなみに俺のような【戦士】ができる仕事……

それはギルドと呼ばれる組合に張り出される数々の依頼をこなす事だ。

もっともギルドと言ってもたくさんあって、

商業ギルドと呼ばれるものや、農業や漁業ギルドという物もある。

その中でも命の危険を1番晒す仕事を賄うギルド……

冒険者ギルドというのに俺は所属している。

冒険者ギルドの主な仕事はモンスターの討伐や捕獲、秘境への探索や宝探しなどだ。

命の危険がある反面、報酬が良いというのも冒険者ギルドならではの。

かたやそれを生業として生きる【狩人】モンスター・ハンターと呼ばれるモンスターの討伐を専門とした人もいれば、秘境への魅力に取り憑かれてそれを専門とする【探索者】トレジャー・ハンターもいる。

まあ、冒険者が個人個人の思想で仕事をしてる場所ってのが冒険者ギルドだと思ってくればそれでいい。

かく言う俺も仕事はモンスター討伐を主体に仕事をしているが、中でも1番ランクの低いCランクの依頼をやっている。

そろそろCランク以上の依頼もやってみたいとは思うものの、どう

してか俺の冒険者ランクが上がらないのだ。
まあ、よく分らない言葉が出てきてはいるが、詳しくはまた今度の機会にということまで目的のギルドの中へと入るのであった。

「おはよークロ」

入った先に挨拶をしてきた金髪碧眼の女性は、この冒険者ギルドの受付嬢であるマリベルさんである。
毎度依頼を受注する際にマリベルさんに承諾を頂きに行くので、名前は自然と覚えたのである。もちろんマリベルさんもしっかり。

「おはようございますマリベルさん」

「もーマリベルでいって言ってるのに」

へらへらと笑うマリベルさん。

「ダメです。マリベルさんは俺より年上なんです」

「クロ相変わらずマジメ。そういうところ尊敬しちゃうなー」

照れる。

「で、マリベルさん。今日はいい依頼ありますか？」

「結構いいのあったと思うよー」

やる気のない声で依頼の張り紙がある掲示板を指す

良いのが入ったと聞いたので、気になって掲示板へ向かい、張り紙

を見る。

「んー……微妙だなあ……」

覗くのはもちろんランクC。

『ウルフの群れ討伐依頼』や『スライムゼリーをちょうだい！』と子供が出したであろう依頼クエストなどがあつたが、どれもパツとしないものばかりだった。

「ようクロー！」

「うおっ！？」

陽気な声と共に勢い良く俺の肩に手を回したのは、腰まである長い亜麻色の髪に鉄の鎧を身に着けた男性 - 俺と同じ【戦士】の親友ザックである。

「ザックか、お前は相変わらず元気なヤツだな」

「なんだあ？ 女性のマリベルには敬語使っておいて、同性の年上である俺には敬語無しか？」

「ザックに敬語は必要ねえ」

「あつはは！ 生意気なヤツめ！ まあそれがお前らしいけどな！
！」

笑いながら俺の肩をバンバンと叩く。

体は一応鍛えてあるが、ザックのほうが俺より体が大きいし力も強い
ため、若干ながら痛い。

まあ、ザック本人も昔からこういう性格のため、俺からしたら兄貴

みたいなもので敬語なんか使う間柄じゃないと決めていた。

ちなみにザックとマリベルさんは恋人同士である

「で、クロ！ お前が求める依頼クエストはあったのか！？」

ザックが陽気というより熱い発言で俺に問う

「いや、無い」と、俺。

「やっぱりかー」と、やる気なしの声でマリベルさん。

「ハッハッハ！ やっぱりランクCクエストの依頼じゃあもうダメか！？」
と、豪快な笑いをするザック。

「……………マリベルさん、そろそろランクCから上げてくれねえかなあ……………」

「そうねえ……………あともうちよつとかな」

声にやる気が感じられなくても、笑うとかわいいんだよなこの人。
ザックが惚れるだけあるわ。

「でも、どうしてクロだけランクCから上がらないんだ？」と、ザック。

「それは俺も気になってたさ。ずーっと前からな」

正直、もうランクCクエストの依頼に出てくるスライムやウルフなどのモン
スターじゃ、もう物足りないというかなんていうか……………。

「うーん……それはねえ……」

目を閉じてしばし黙るマリベルさん。

「秘密」

「!?!」

マリベルさんの会心ウィンク!

ただでさえ顔立ちが整っててかわいいというのに、素であんなことをするだなんて……!

バカな……ここまで破壊力があるものだったとは……っ!! マリベルさん……おそろしい人っ!!

で、案の定ザックは、

「なんて可愛さ……まるで天使が目の前に降臨したかのようだ……」

「やあーだザックったらー」

……。

……。

ちくしょうノロケやがって!

……く、くやしくないもんねっ!

すると勢いよく冒険ギルドの扉が開き、

「クロ殿! クロ・ヴェルス殿はおられるか!」

顔以外はライオンの紋章という『エルンスト』特有の鎧を着た金髪の青年が現れた。

「あの、俺に何か用ですか……？」

キリッとした顔立ちに、統率された動きと大声に驚いて少々圧される。

「クロ・ヴェルス殿に！！ 我等が『エルンスト』国王様から直々にお話があるというので！ 直ちにお城にくるようにお伝えしるとの命を受けてここに来ました！！！」

「国王が俺に話？」と、青年の言葉を反芻する。

「はっ！！ では、確かに伝えましたゆえこれにてごめん！！！」

「あっ！ ちょっと！！！」

と、おそらく国王直属の騎士団の人はそう言い残して、鉄砲の玉のごとく去っていった。

「国王が直々に……なんだろう……？」

俺は国王に呼ばれるような原因を考える……
だが特に思いつかない。

「クロー。何かしっちゃったのー？」

「ハッハッハ！！ クロ！ ついに国王が直々にお前と話すくらい
の悪事を働いてしまつとは！！ 中々やるなあ……！！！」

「もう俺犯罪者扱い!?!」

全くこの人らときたら!

すぐ俺が何か悪いことをしたように話を持って行くこととする!?!
俺は何もしてないはずだ!?!……多分。

第4話「チェリー・プロッサム」

騎士団の青年から伝令を受けて今までの俺の汚点を振り返っていた。

やはり該当なし。

これっぽちも王様の目に止まることはしていない。
でも、以外な所で言われるかもしれない……
あー……不安になってきた……。

「クロー」

やる気のない声で俺の名前を呼ぶマリベルさん。

「王様はねー、『ミックスレインボーチェリー』が好きなんだよー」

「え？」と、怪訝な顔で俺。

マリベルさんの言った『ミックスレインボーチェリー』は、とある島で実るサクラランボのことで、1つのサクラランボに7つの味が含まれているし、色もまるで虹のようだ。こうして名付けられたのが『ミックスレインボーチェリー』の由来らしい。ちなみに1パック440E^{エーテル}

「それは確かな情報ですか……？」

頬には汗が流れる。

「うん」と、微笑むマリベルさん。かわいい

気がついていたら口元は上がっていて、ドクンと脈打つ。

さすがはマリベルさんだ……。

伊達に冒険者ギルドに居ただけあつて人脈広い……っ！

「じゃあ早速買いに行きます」

「ハツハツハ！ ワイロか！ クロ！」

「マリベルさん。ありがとうございます」

「え！？ シカト！？」

ザックが何か言ってたが、まあ放っておこう。じゃ、早速果実屋に向かうとしよう。

??

サイフの中身を確認したところ、1000E入っていた。

丁度……今月出る本を買うつもりだったんだけどね……。

日頃から金使いが荒いところなるというのを心に刻んで例の物を買おう。

本はまた仕事したお金で買えばいい。

あ、こうしてお金が徐々に無くなっていくんだわ。

「いらっしやい」と、気前が良さそうな果実屋のおばちゃん。

「『ミックスレインボーチェリー』をー」

と、おばちゃんに頼む前に目の前に黄金色に光ってる物を見つけた。あまりの輝きに目が眩む。これは夢の中で経験した女神の光と似ている。

「おばちゃんこれはー？」

素朴な俺の質問におばちゃんはフツと笑い、衝撃的な発言をした――

「……『ミックスレインボーチェリー』だよ」

「はっ!?!」

おもわず素っ頓狂のような声を上げてしまつほど、おばちゃんこの発言は衝撃的だった

思い出してほしい。

俺が知ってるハズの『ミックスレインボーチェリー』は虹色でフツの味がするサクラランボだ

ところがこの『ミックスレインボーチェリー』は黄金色だ！ 一般的な見たこともない！！

「あら、こんなの見たことないって顔してるねえ……」

「実際に見たことないからね……本当に『ミックスレインボーチェリー』なの？」

「そつだよ。数年に1度しか生産されない数量限定黄金色に輝く『ミックスレインボーチェリー』！ 味も見た目も最高級!!」

「うおおおおおおっ！！！！！」

心の底から溢れる確かなものを感じて、俺は叫んだ！

「ただしっ！！ お値段のほう少々」

「ああ）……………」

しかし、それを聞いてがっかりした。
数量限定。おそらく440E価格の『ミックスレインボーチェリー』よりもちょいと高め。

となるとつまり……………現時点で俺の全財産が……………消え去る可能性があるということだ……………

「この黄金色『ミックスレインボーチェリー』まあ、『ゴールド・ミックスチェリー』とでも言おうか。値段がなんと……………2000E……………」

ドサツと俺の膝とサイフが崩れる音がする。

絶望した……………全財産より1000E多い……………だと……………
これじゃあ、王様へのワイロ……………いやいや贈り物が買えないじゃないか……………。

「す、すいません！！ この『ゴールド・ミックスチェリー』くださいー！！！」

と、落ち込んで地面と顔合わせをしている俺の隣に興奮して鼻息が

荒い少女の声が聞こえる。

その声があまりにかわいいかったので、顔を上げて声の主を確認する。

- - 桜。

そういう言葉とそう感じた理由は、肩まで伸びた桃色のショートボブが風になびく度に俺の脳で桜のイメージーションを想起したからだ。

それだけじゃない。

彼女の透き通ったキレイな緑色の両目に、マリベルさん以上にやわらかい口調。

それに『ゴールド・ミックスチエリー』に興奮しているからなのか両頬は少し赤みを帯びている。

俺は三位一体揃った彼女を見た瞬間に、時間が止まったのではないかと錯覚していた。

「あの一……」

彼女の声が俺に向けて発せられたのを数秒遅れてから反応する。

「地面に手を着けてますけど……大丈夫ですか……？」

「！」

姿勢を俺目線に低くしてくれて、またもや数秒遅れて反応。

「あ、ああ！ ちょっと金銭的問題にぶつかっちゃって打ちひしが

れてただけだよ」

我ながら抑揚の無い会話をしてしまった。
ちよっぴり反省。って何を言ってるんだ俺。

「ですよね〜！ いくら数量限定とはいえ、『ミックスレインボー
チエリー』の倍近くの値段なのは一般の家庭人のサイフには困難で
すよー！」

『ゴールド・ミックスチエリー』が入ってる袋を握りしめ熱弁する
彼女。

「全くだよ……全財産10000Eよりも更に10000E高いとか…
…はぁ……」

「お、お気の毒に……」

落ち込んでる俺を心配した彼女は急に何かを思いだしたかのように、

「あつ！ いけない！！ そっいえば用事があったんだ！！」

「なら、早く行ったほうがいいよ」と、手を地面に着けながら言う
俺。

「で、では……！」

袋を握りどこかへ走り去っていく彼女を俺はずっと見ていた。

……

……。

……まだ顔赤いかな？

「青春だねえ〜」

思いふけるようにはおばちゃんがそうつぶやくと、俺は顔を2回軽く叩いて『ミックスレインボーチェリー』を購入した。

第5話「邂逅」

果実屋で『ゴールド・ミックスチエリー』を買った、どこか幼い顔立ちで桜を想起させるキレイな髪を持つ彼女のことがまだ頭から離れない。

多分他の人が彼女を見ると、見惚れると思う

- - 俺にとってそれほどに魅力のある存在だった。

今も顔が赤いと思う。

手で叩いた赤みじゃなくて、頬が熱を持つ感覚。

しっかりしろ俺。

心で自分に言い聞かせ、両手で両頬を叩く。

現在地点は『エルンスト』王国の国王が居られる城の城門前だ。

門番兵は2人。鎧を装着してるが顔は素のまま、それぞれ片手に槍を持っている。

そして兵士の1人が俺に気づき、俺に笑顔で話かけてきて、

「クロ・ヴェルス殿ですね。どうぞ、国王様がお待ちになられています」

俺は兵士さん（敬意を込めて）に一礼し、扉を開けて城の中へと足を進めた。

「完全に別世界じゃん……」

- - 初めて入る国王の住む城の中。

赤い絨毯に絢爛豪華な層度品。

城の中を歩き回る兵士達。

普段の俺の生活からは微塵も絡む要素がない要素が今、目の前に。

「えーつと……謁見室は……と……」

今入り口だけど、道が3つに別れてる……どっちだ……？

「クロ殿」

いきなりのトリップにより、城の廊下をキョロキョロとする俺にまたもや『エルンスト』の兵士さん、今度はこんびりとしたマリベルさんとは真逆のキリッとした凜々しいお姉さん兵士さんが話かけてきた。

「謁見室は2階にあります。少し遠いですがこの道を真っ直ぐいけば謁見室ですよ」

「あ、どうも……」

無愛想な返事に、笑顔のお姉さん兵士さん。

この国の兵士さん達は優しいなあと、心で感謝をして先程教えられた道のりを俺は進み始めた。

???

「はあ……はあ……長かった……っ！」

肩で息をする俺。

階段への道は思ったよりも『エルンスト』の兵士さん達の優しさに

反比例していたとしみじみと思いつつ、その状態を継続させて謁見室に続く階段を登りはじめたものの、おおよそ半分近く登ったところで休憩を挟んだ。

途中で兵士さんが俺を横目に見ながら階段を降りていったが、いつまでもここで休憩をすると流石に迷惑と感じて休みなしでこれを登りきり、結果がこれである。

俺が体力ないわけじゃないよ。

ここの兵士さん達が体力多いだけだよ。

肩で息をするのに慣れて、1度深呼吸。

そして謁見室の扉を開ける。

「おお、よく来たなクロよ」

俺に気づいた国王。

実際に本物を見るのは初めてだった。

胸元まで伸びた銀色のヒゲに、赤い毛皮のマントと冠を被ったステキなおじさまを想像してくれたら（第一印象以前に、一般階級の俺に会ってくれるという時点でステキなおじさま確定）丁度それが当てはまる。

隣には王妃と思われるステキなおばさまも居らしてらっしゃった。

「さあ、そんな遠い所に突っ立ってないで、もっとこっちに来てはくれまいか？」

厳格という感じも全くなく、柔らかい微笑みを見せてくれる国王。それに従う俺。

うっ……国王は普通に俺と話したいだけなのだと思うんだけど……妙なプレッシャーが……。

「クロよ。今日お主をここに呼んだのは・・・」

「王様！ 不躰ながら発言を許してはいただけないでしょうか!？」

国王のありがたい言葉を遮って発言する。

「う、うむ。構わないが」

「では・・・」

カバンの中から『ミックスレインボーチェリー』を取り、前に差し出す。

「これで勘弁してください」

囚人のような気持ちで懇願する俺。

「ふっ、ふははははっ!！」

「へ?」

国王が急に笑い始めたので、素っ頓狂のような声を上げた。

「クロよ、お主もしかしてこれはワイロか?」

にこやかな笑みで問う国王。

そのにこやかさが逆に怖さを生む。

これは、正直に話したほうがいいのか……?」

「はい、ワイロです。王様と直々に話せるような出来事には自分の記憶にはございませぬ。あるとすればそれは悪い事。正直ガクブルが止まりません」

マジ膝笑ってるぜ……

おい膝！ お前もケラケラと笑う年頃か！？

「はははっ！ 面白いのうー！ やはり若い者は個性豊かなのが多い！」

「恐縮です」

「安心してくれたまえクロよ。主は何も悪い事をしておらん。ただ純粹に話がしたいだけじゃ」

純粹に話したいだけ……か。

何だ俺、変な妄想しちゃってよ。

「して、お話とは？」

「うむ、そうであった……」

先程の愉快的な雰囲気から一気に厳然たる顔つきへと変化した。

「クロよ……魔王……という存在を知っておるか……？」

「はい。魔族の頂点に座する悪しき者……でよろしいでしょうか？」

「そう……その魔王がな……どうやら近年に復活するらしい」

「……は？」

「またもや素っ頓狂。」

「それもそのハズ、魔王という存在は遙か昔に勇者が封印したという伝説が色んな書物に記されている。」

「もはや空想の産物として描かれる物が、こうして実際に復活すると言われても絵空事にしか感じなかった。」

「なんとというか……眉唾ものですよ……」

「そう思うのも無理はない……しかし、ここ最近の国の近況を聞くと、魔物による被害が年々増えておるのだ」

「……そう考えると信憑性が浮かんできますね」

「思い出せば冒険者ギルドに貼ってあった依頼クエストの量も年々増えてきてたな。」

「主にBランクからだけ……。」

「そこで私達は、来るべき魔王復活に備えて現在【勇者】を育てておるのだ」

「【勇者】……ですか？」

「またもや書物レベルの単語が国王により発せられた。」

「その【勇者】とやらは、この国の誰よりも強い……とか？」

申し訳ないがジト目。

状況によってこの【勇者】という言葉は、揶揄にしか聞こえない故。

「いや、この国の熟練の戦士達に比べると未熟者であるな。限りない潜在能力があるのは分かるのだが」

と、ここで本題に戻ろうと思う。

大方予想は付くが。

「それで、俺にどうしろと?」

さっきより態度が悪いな俺。

あー申し訳ない国王様。

「うむ。そこでお主に【勇者】と共に、この国周辺の魔物の調査をしてほしいのだ」

「つまりは依頼というわけですね?」

「そうだの。主に森を調べてきてほしい。難易度で言えば……Bランクかの」

「Bランク!?」

急に大声を上げたため、ビツクリした様子の国王。

だってよ……仕方ないじゃん?

今まで謎のCランク縛りでマンネリとしてた俺にとってはマジ嬉しい出来事だ。

「い、いいか？」

「あ、はいすみません」

いかんせん取り乱してしまった。

「それでクロよ。お主にはまだ未熟な【勇者】を連れて森の調査をしてきてほしいのだが・・・」

「拒む理由はありません。それがBランクの仕事なら尚更です」

「よし、交渉……とは聞こえが悪いが、成立だ。今から【勇者】を呼ぶ、連れて参れ」

国王の側近が深く頷き、部屋を出る。

それにしてもBランクの仕事かあ

報酬はCランクよりどれだけ増えているんだろう……

敵はどんなヤツが出てくるんだろう……あゝなんかゾクゾクする……

……っ！

……と、これは【戦士】の悪い癖だ。

俺も随分と【戦士】になつたものだなあ……

と、謁見室の扉が開く音がしたので、俺は【勇者】とやらの顔を見るべく振り返り……

「え？」

息を呑んだ。

いや、呑むしか無かったとしても言うべきだろうか。

側近が連れてきたというその【勇者】の姿を……違う場所で見ただけのその可憐な姿を……
思い出す為の脳に伝わる電撃のスピードは、人類のかつてを超えるモノを想起するだろう

『ゴールド・ミックスチエリー』を買ったあの娘が【勇者】だなんて、俺は勝手ながらも運命を感じた。

第6話「青空と空回り」

『エルンスト』の街出入り口の前に立って早数分。

俺は王城の謁見室で出会った【勇者】 - - 桜色の髪の彼女と共に、『エルンスト』南東部に携える森の生態調査を国王により頼まれたのだが、どうやら彼女が武器を忘れてしまったらしく家に戻っており現在に至る。

けれど少し遅い。

この街はあまり広くはないのだが、彼女の家は街の出入り口より遠いので時間が掛かっているのだと勝手に推測する。

空は曇り無き青色。

横に生えてる木の枝に恋仲と思われる小鳥が2匹鳴いているのを見て、今日は絶好の依頼日クエスト和だなぁと顔がほころぶ一方で、小鳥なのにリア充？ 爆発すればいいのにと嫉妬に狂った自分を嫌悪していたのは内緒だ。

そんなどうでもいい事を思う途中に、1つの人影がこちらへ向かってくるのを確認。

大きくなるにつれ、徐々に輪郭が明らかになっていく。

背中に携えた剣に、緑を強調した服、それすらも芸術の一部に変えてしまうような純麗な桜を想起させる髪。

極めつけがそれらの基盤である端正な顔立ち。

正に美少女の名に相応しいその少女が、俺の待つ【勇者】本人であった。

「ごめんなさい、待ってましたよね？」

「いや、俺も野暮用があつてさつきここ来たばかりだから」

肩で息をする彼女。

それに対しウソつきの俺。

なんだこれ、ドラマか？ リア充か？ 待ち合わせの時のシミュレーションもバッチリだな。

「じゃ、行くか」

桜色の【勇者】と黒色の【戦士】の異色のコラボレーション。修行がてらに向かう目的地は南東部に位置する森だ。

??

「おー……！」

目の前に広がる大草原に歓喜の声を上げる彼女。

「そんなにスゴい？ えーっと……」

「サクラです。サクラ・フロンターレ」

「俺はクロ。クロ・ヴェルス」

互いに自己紹介を交わした所で閑話休題。

まさかの年上って可能性があるなので敬語で話してみるとする。

「サクラさんは、もしかして外に出た機会少ないんですか？」

「あまり外には出てない、というより出られないって言ったほうが

正しいのかもしれないね」

それを聴いて想像する。

いずれ復活をするという【魔王】の敵である【勇者】を秘密裏に育てていると国王の話を思い出した俺は、一步外に出ると他の魔族に【勇者】の存在が知られてしまうと予想。

これじゃ秘密裏の意味がない。

故に国王は、聞こえが悪いがサクラさんを半軟禁状態で街に留めていたのだろう。

【勇者】ってのも、意外と辛い道のりを歩んでいるんだな。

しかし疑問視。

今回に限って未熟な彼女をどこの馬の骨とも知れない俺と行動を共にするメリットは？ 修行がてらには言われたものの、

どこからか魔族が【勇者】の行動を監視しているかもしれないというデメリットを予想した故の行動か？

裏を返せば、どうして俺たちじゃないとダメなんだ？

生体調査ならば、近衛兵の1人や2人を派遣すればいい事。

【魔王】を敵視してる国王は、この行動の意味を理解してるのだろうか？

疑心暗鬼になったら色々疑問部分が浮かんでくる。

ここは1つサクラさんに国王から何か聴いてないか水を向けてみよう。

「なあサクラさん、どうして今まで街から出られなかったんだ？」

「迷子になるからです」

「・・・え？」

頭の中を大量の「？」マークが埋める。

え、待つて待つて。

今なんて言ったかうる覚えだからもう一回聴いてみるとしよう。

「なあサクラさん、どうして今まで街から出られなかったんだ？」

「迷子になるからです」

同じ回答だった。

それも上記と同じ文章で。

おっと作者の手抜きではないと信じてくれ。

「迷子？ 迷子って、あの迷子？何故に迷子？」

猛烈に迷子という単語がゲシュタルト崩壊寸前にまで登り詰め、一瞬思考が止まるとはこの事を言うのだと身を持って体験した。そしてサクラさんは真摯に、

「そうですね。私って昔から迷子になるらしく、気がついたら知らない場所に居るから『毎回探すのが大変だから貴女は勝手に動いちゃダメ！』ってお母さんに言われました」

それが今日までの日常だとサクラさんは言った。

なんか……王様、妙に疑ってしまっでごめんなさい。

「あ！ クロさんあれなんですか!？」

サクラさんが声を上げて草原の向こう側に指を指す。
そこにいたのは丸い目に体をプルプルと揺らすゼリー状の生き物。

「スライムですね」

「ス、スライム！」

目を星のように輝かせスライムの元に足を進め、前かがみになり指
先で2回スライムを突つく。

「わぁ……プニプニ……」

再度突つく。

そんなにスライムが珍し……ああ、そういうことか。

「クロさん！ スライムスゴいプニプニですよ！」

無邪気の子供のようにスライムを突ついているその姿を見て、自然に
顔がほころぶ。

「わぁ……うわぁ……！」

何度も突つくサクラさんにされるがままのスライム。
しかしそれにイラついたのか、およそ10回目の突つきを境に、ス
ライムがサクラさんの顔に体当たりをする。

「あいてっ！」

突然の体当たりで尻餅を着くサクラさん。

このスライム！ サクラさんに何をやるんだ！

剣を抜いてスライムを一刀両断！ この斬り心地は言うならば豆腐。力を全く必要とせず、軽く降ろすだけ。俺は剣を収めてサクラさんの手を取る。そこでサクラさんは、

「あ！ スライムがない！」

右往左往とスライムの所在を確認。

「俺が倒したよ」

そう告げるとサクラさんは戦慄が走ったような表情の後、しゅんとした表情で、

「スライム……もつと触りたかった……」

瞬間俺の両頬が熱くなるのを感じたのと、王様の『【勇者】』として『は未熟』という言葉を思いだし一抹の不安が過る。もし、これから向かう場所にスライムのように愛らしい姿で内面えげつないモンスターが現れた場合、サクラさんは油断して近づきそこから想像するのも恐ろしい事態に進みかねない。

そこも含めて経験者の俺がすっかりしていかないと思い、熱く火照る両頬にパチンツと叩き気合いを込め、目的地へと進むのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8602x/>

戦士くんと勇者ちゃんと

2011年12月11日15時54分発行